
感染殺人～バイオキリング～

流星群

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感染殺人（バイオキリング）

【Nコード】

N3851Z

【作者名】

流星群

【あらすじ】

これは人の命を助ける――そんな感動的で素晴らしい物語ではない。生まれながらにして殺人鬼の主人公が、殺人鬼共を？狩る（ハウンティング）？話。

【プロローグ chapter 1-1】（前書き）

《作者からの一言メモ》

新しく書き始めた小説です

電撃大賞用で、各話が80～130ぐらいいくと思います（電撃大賞の上限と同じ枚数にするので）

ですから、賞に送る前に、感想、評価等をしてくれたら作者が大喜びします！

書き終わること前提なので、長い目で見てください

【プロローグ chapter 1-1】

「絶対にクロス！」

狼は一匹の兎^{えもの}を狙っていた。

真夜中の路地裏は、空の色より更に闇^{くら}い。ぽつりと立っている電柱の、心許ない明かりだけがそこら辺を照らしていた。汚物やらゴミやらが散乱し、より一層不気味にさせている。

そこを二つの影が通る。

息を切らし、ゴミに躓きながらも必死に走る兎。それを難なく追う、狼。

彼らはかれこれ一時間以上も走り続けていた。

人がいれば、狼はその場を撤退し、兎の命は助かっていただろう。けれど、夜中とあって、しかも路地裏では人の気配さえもない。

「コロスコロスクロス！！」

狼はもう何度目かの怨嗟を口にしながら、右手に握り締めていた黒光りする硬い物体——拳銃を兎に向け、引き金を引いた。

パンッ！！ と乾いた発砲音がし、ビルの外壁に大人の親指程度の小さな穴が空いた。

兎はヒイイッ！ と叫び声を上げながら曲がり角を右に逸れる。

「いいぞいいぞ！ 徹底的に追い詰めてやる……。コロシてやる！
クククッ……ハハハハハッ！！」

齒をむき出しにして高らかに笑い、銃刀法違反の日本で拳銃を持ち歩く姿は、まさに獲物を狩る狼のごときである。

こうして狩人は、拳銃で獲物を脅し、表通りに出られないように誘導していたのだ。

路地裏の、もつとも深い場所へと引きずり込むために。

闇の奥へと誘う獲物を、狩人は口元を不気味につり上げて、悠々と追いかけていた。

絶好の好機を伺うべくして、時を待つ。そして、その好機は、突然にして巡ってきた。

「ぜえぜえ……。はあ……。うっ、嘘だろ！！ 何で！ どうして行き止まりなんだよ！！」

彼らが最終的に行き着いた所は、ビルの壁で囲まれた行き止まり。薄汚れた壁に背を預けて獲物はずるとへたり込んだ。どうあがいても逃げられないと悟ったからだろう。狩人は、ゆっくりと獲物に近づいていく。

ビビビと、虫共が群がる電柱の下に、彼らの顔が曝される。

獲物はまだ若かった。齢一五、六ぐらいの少年。金髪に染まった髪が汗で頬に張り付き、顔は苦痛で歪んでいる。元は綺麗だったのだろう制服は汚れ、茶色がかったいた。

対して狩人の方かというと……。彼も若かった。金髪の少年と同年代である。黒髪で眼鏡を掛け、どこか陰鬱そうな印象を受ける。けれど、彼は金髪少年とは違い、汗を一つもかいていない。出来損ないの笑みを浮かべ、余裕そうにしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3851z/>

感染殺人～バイオキリング～

2011年12月13日00時58分発行